Pick up! PLAY HOUSE

NODA・MAP 第26回公演

「兎、波を走る」

作・演出：野田秀樹

Usagi, nami wo hashiru

虚実の波のうねりが運んでいく先

絶賛上演中のNODA・MAP「兎、波を走る」。さて、その見どころは？
作・演出の野田秀樹への取材をもとに、演劇ならではの表現に満ちた最新作の魅力を探る。

“虚実ないまぜ”の芝居は珍しくないが、野田作品ほど“ないまぜ”具合が特異で傑出した芝居はないように思う。ふんだんな言葉遊びで結合した“虚”＝フィクションと“実”＝ノンフィクションは、あたかもDNAの二重螺旋のように見事に紗(あざな)われ、観る者を時に笑わせ、戸惑わせ、驚嘆させながら、思いもよらぬ場所へと運んでいく。それは劇場でこそ味わえる、得も言われぬ体験だ。

なかでも、「タイトルやチラシから、みんな色々想像してくれていると思うんだけど、たぶんどれも裏切ることになると思う」と野田が語る今回の作品「兎、波を走る」は、かなり“虚実ないまぜ”度が高そうだ。なにせ舞台は、潰れかかった遊園地にある劇場。そこを所有する元女優の依頼で、2人の劇作家が“アリス”の芝居を書こうとするが……という物語を、ルイス・キャロルの名作『不思議の国のアリス』を大枠のモチーフに、昨今話題の“新しい技術”も絡めながら描いていくという。

「雰囲気としては、夢の遊眠社時代の作品と似ているかもしれない。現実の世界と妄想の世界を行ったり来たりするから、中盤あたりで“え、今どこにいるの!?”という感じになるお客さんも結構出てくる気がしますね。でも、出口はちゃんと見えてきますよ。俺の芝居は、若い人からよく『難しい』とか『わからない』なんて言われるんだけど、扱っている題材自体は若い人にもわかると思う」

野田がその題材で芝居を書こうと思い立ったのは、約2年前。「書いていいものだろうか」と迷いつつ資料を読み、時に無力感に襲われながらも、「自分が書いておくことで少しでも残るなら」という気持ちで書き進めたと話す。

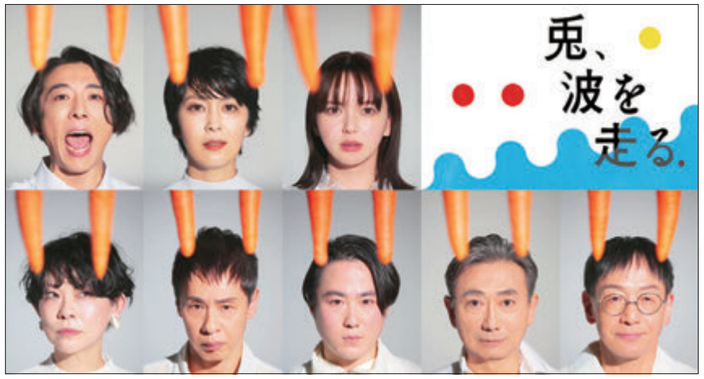
「今は、書き切ってよかったと感じています。稽古にも、身の引き締まる思いで臨みました」

そんな虚実の二重螺旋の立体構造を支えるのは、頼もしいスタッフと、野田が「いつもいいキャストだと思っているけれど、今回はまた一段といい」と太鼓判を押す出演陣だ。高橋一生は兎、多部未華子はアリス、松たか子は母親、秋山菜津子は元女優、大倉孝二は“不条理な役”を演じるのだそう。

「(大鶴)佐助と(山崎)一の役も含めて、どれもキャストを想定して、役者自身が役を膨らませてくれることを前提に書きました。特に“兎”には、一生の身体能力ならやり切れるだろうと思って書いた場面があります。まあ本人は、稽古前のワークショップの時から『勘弁してくださいよ～』と言ってたけどね(笑)」

「“新しい技術”に最終的に立ち向かえるのは、人間の肉体でしかない」とも語る野田。確かに、生の人間が目の前で演じるからこそ、より胸に響くものがある。見え隠れしていた“実”が、演劇だからこその表現で描かれる“虚”の波の向こうに立ち現れた時、我々は何を感じ、どう向き合うのか……？ 当日券も出るそうなので、得も言われぬ体験をぜひ！

取材・文：岡崎 香（演劇ライター）



6月17日㊏～7月30日㊐　プレイハウス 詳細はP08へ

作・演出：野田秀樹
出演：高橋一生　松たか子　多部未華子
秋山菜津子　大倉孝二　大鶴佐助　山崎一　野田秀樹

秋山遊楽　石川詩織　織田圭祐　貝ヶ石奈美　上村聡　白倉裕二
代田正彦　竹本智香子　谷村実紀　間瀬奈都美　松本誠　的場祐太
水口早香　茂手木桜子　森田真和　柳生拓哉　李そじん　六川裕史

大阪、博多公演あり。全公演当日券あり
NODA・MAP公式ホームページ：**https://www.nodamap.com**

Pick up! THEATRE EAST

「公文協アートキャラバン事業 劇場へ行こう3」参加事業

「エブリ・ブリリアント・シング ～ありとあらゆるステキなこと～」

作：ダンカン・マクミラン　ジョニー・ドナヒュー　翻訳・演出：上田一豪　出演：佐藤隆太

Every Brilliant Thing

次の日に生かせる力を持って帰ってもらえたら

「エブリ・ブリリアント・シング」が再演される。2020年の日本初演時、
口コミで客足が伸びていったという話題作に今再び挑む心境を、佐藤隆太に聞いた。

佐藤隆太の一人芝居「エブリ・ブリリアント・シング～ありとあらゆるステキなこと～」が3年ぶりに上演される。ただこの作品、一人芝居であっても一人では“成立し得ない”作品で、佐藤は上演中、ひたすら劇場を駆け回り、演じ、歌い、観客とコンタクトを取り続ける。舞台と客席を繋ぐのは、開演前に佐藤から配られる1枚のカード。カードには、番号と共にある言葉が書かれていて、その言葉こそが、佐藤演じる“僕”がママのために書き出した“人生のあらゆる素敵なこと（エブリ・ブリリアント・シング）”なのだ。

初演について、佐藤は「本当に幸せな時間でした。一方で、とても手強い作品でした。舞台って初日が開けばたいてい緊張が減っていくんですけど、この作品は毎回違うお客さんと芝居を作るので常に初日のような感覚で。そのプレッシャーは大きかったです」と振り返りつつ、「でも僕の俳優人生の中で味わったことの無い感動を得ましたし、できることなら一生この作品と付き合っていきたいと思う、宝物の作品になりました。芝居を続けてきて、この作品と出会えてよかったなと心から思いましたね」と話す。

笑いと温かな感動に包まれる本作だが、描かれている内容はシリアスだ。当初７歳だった“僕”は、生きることに疲れてしまったママを励ますために、日々の素敵なことを書き出すようになる。しかし、いつしかそれはママのためから“僕”のためへと変化していき……。演じるうえで常に佐藤が意識していたのは、「重たいテーマを扱ってはいるけれど、寄り添う優しさと明るさを胸に演じることで、皆さんが明日に生かせる力を持って帰っていただきたい」ということ。そして「いい日ばかりではないけれど共に歩んでいこう、と思えるような関係性をお客さんと作りたい」ということ。実際、作品に影響を受けて人生が変化したという手紙が観客から届いたそうで、「何か伝わるものがあったのかなと思うと、すごくうれしかったですね」と佐藤は感慨深げな表情を浮かべた。

３年ぶりの上演となる今回は、翻訳・演出に上田一豪が加わる。「とても温かいお人柄なので、この作品の醍醐味を存分に引き出して下さると思っています。具体的なことはこれからですが、ひとつ心配なのは歌のシーン。この作品において音楽はすごく大事な要素なんですけど、（ミュージカルも多数演出している）上田さんなので、そこがもしスパルタな演出になってしまった場合、音痴な僕が付いていけるかどうか（笑）」と、言葉とは裏腹にワクワクした表情を見せる。再び本作に向き合うことについては、「めちゃくちゃ楽しみで興奮してます。と同時に『大丈夫かな』って……。この気持ちはきっと、今回も毎公演続くんでしょうね」と心中を明かす。「でもお客さんにはとにかくリラックスしていただいて。決して難しい要求はしません。僕の使命は“何が起きても絶対に肯定する”ということですから！ 導かれるままに参加していただけたら」と力強く語った。

取材・文：凛（演劇ライター）

撮影：中村彰男

8月11日㊎㊗～27日㊐
シアターイースト 詳細はP10へ

作：ダンカン・マクミラン
ジョニー・ドナヒュー
翻訳・演出：上田一豪
出演：佐藤隆太

豊橋、富山、水戸、いわき、北九州、熊本、高知、大阪、名古屋、松本公演あり

掲載情報に変更がでる場合がございます。最新情報は、劇場や各主催者のHPなどでご確認ください。